

1. 植物の学名の表記方法：

1-1. 国際植物命名規約 (International Code of Botanical Nomenclature) 中の「植物命名規約」の項目に従う。

- ・ 属名 (generic name) 頭大文字、小種名 (specific epithet) の順に二命名法で半角スペース空けてラテン語で列記。
- ・ 必要な場合は小文字で始まる「亜種名」、その後「命名者」と「発表年」を追記、省略されることもある。
- ・ 属名と小種名はイタリック体 (斜体)、それ以外はローマン体 (斜めになっていない文字) で表記。
- ・ 属名を付けずに種名・種小名だけを書くことはしない。
- ・ 小種名が同定できないものは属名の後にイタリック体にせず sp. (species plural) や spp. と表記。sp. が単数、spp. が複数を示す。

センリョウ 和名	<i>Sarcandra glaber</i> Makino	Sarcandra glaber Lithocarpus edulis	果肉がリンパ腺状 無毛 石の果実、硬い 食べられる
マテバシイ 和名	<i>Lithocarpus edulis</i> (Makino) Nakai	属名 種名 命名者	
	Genus specific epithet		
ハウズキ 和名	<i>Physalis alkekengi</i> L. var. <i>franchetii</i> (Mast.) Makino	属名 種名 命名者	
	Linneの簡易形	続く語が変種名	
	Physalis	水泡、泡	
	Alkekengi	ハウズキのアラビア語名	
	franchetii	日本の植物を研究したフランスの分類学者	

- ・ 種小名は原種なら小文字ではじまり、交配種の場合は大文字ではじまる。(例：Paphiopedilum Bingleyense)

1-2. 種類によって名前が複数付いてしまうことがある。そのときに適用されるルール：

- ・ シノニム (Synonym—同物異名)：同じ植物に2つ以上の名前が付いていることで別種だと思われていたものが研究の結果同じ種類であったことが判明したとき、別々の人がそれぞれ一つの種に名前をつけたとき、すでに命名されているのに、知らずにまた記載されたとき、など。
- ・ ホモニム (Homonym—異物同名)：2種類以上の別の植物に同じ名前が付いていること。種類数が多いため、新種を記載するときに、知らずに同じ様な名前を使用してしまう事がある。

2. 使いやすい学名検索データベース

2-1. GBIF (地球規模生物多様性情報機)： <https://www.gbif.org/>

Global Biodiversity Information Facility free and open access to biodiversity data.

- ・ 世界各国の自然史博物館、研究機関、大学などが維持している標本のデータと野生生物の観測のデータを集めたポータルサイト。
- ・ 地球上のあらゆる種類の生物に関するデータを誰でも、どこにでも、オープンアクセスで提供することを目的として、世界中の政府から資金提供されて設置された国際的なネットワークであり、データ基盤 (インフラ)。ある種がいつ、どこで記録されたかという情報を共有できる。
- ・ 18~19 世紀に収集された昔の博物館標本から、最近この数日から数週間で記録された DNA バーコードやスマートフォンの写真まで、さまざまな情報源から得られた知見が含まれている。
- ・ GBIF ネットワークは、ダーウィン・コア (Darwin Core) を含む標準形式を使用することによって、さまざまな情報源のデータを統合している。

・ Darwin Core: <https://gbif.jp/datause/dataformat/>

標本、観察データの標準交換形式であり、インターネットを通じてデータ共用するために使用される。

2-2. 植物和名—学名インデックス YList： http://ylist.info/ylist_simple_search.html

- ・ 北海道から沖縄・小笠原に自生、帰化している全ての維管束植物と主な栽培植物についてのデータベース。
- ・ 和名や学名などの kw を用いて検索できる。和名をみの植物名リストから学名付きのリストを作成できる。
- ・ 和名 (標準和名と異名を米倉の判断で決定したものを記載)、学名 (正名と主な異名およびその出典を記載)。
- ・ 学名が引用されている主要植物誌の頁番号、所属する科名 (新 Engler, Cronquist, APGII) とそのコード番号
- ・ 出典：学名が引用されている日本の主要植物誌：

日本の野生植物 (1982-2003)、原色日本植物図鑑 (1957-1979)、新日本植物誌 (1983)、Flora of Japan (1993-)